

ダニエル書 - ナンバー百五十七

ダニエル書におけるキュロスの預言的象徴性を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-25

第10章1節では、それがキュロスの第三年であったと記されているが、第1章では、ダニエルが生き、もしくはは在り続けたのはキュロスの第一年までだと記されている。

こうして、ダニエルはキュロス王の第一年まで仕え続けた。ダニエル書 1:21

キュロスは二年間、メディア人のダリウスと実質的に共同統治していた。したがって、それは彼にとって三年目であったが、同時に一年目でもあった。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1.

預言的には、クロスはダニエル書の最初と最後の幻において登場する。すでに以前の記事で述べたように、ダニエル書1章は黙示録14章の第一の天使を表している。第一の天使が預言において識別されるとき、それは黙示録14章の三天使に属する預言的特徴をすべて備えている。第一の天使において表される永遠の福音の三つの段階は、「神を恐れよ」「神に栄光を帰せよ」「神の裁きの時が来た」である。

ダニエルと三人の卓越した者たちは「神を畏れた」ゆえに、バビロンの食物を退け、菜食を守ることを選んだ。その後に行われた目に見える試験において、ダニエルと三人の卓越した者たちは、バビロンの食物を食べた者たちとの対照において、その健康な容姿によって「神の栄光を現した」。三年の後、「さばきの時」が到来し、ネブカドネツアルが彼らを試したところ、彼らはバビロンのすべての知者たちに比べて十倍も賢いことが明らかになった。

永遠の福音の三つの段階は、ダニエル書の最後の章においても、終わりの時に封印が解かれる光に対して責任を問われる者たちが、知識が増し加わることによって身を清め、白くされ、練られていく過程として表されている。ダニエル書の1章でも最後の章と同様に、三人の天使すべてを含む第一の天使の三つの段階が示されている。1章が第一の天使の永遠の福音であるゆえに、ダニエル書2章は黙示録14章の第二の天使を表し、そこでは、1章の三段階における第二の試練と同様に、獣の像かキリストの像かという試練が表されている。

ダニエル書の第1章と第2章が黙示録第14章の第一と第二の天使を表しているので、第3章とデュラの平原での試練は、獣の刻印を受けてはならないという警告を伴う第三の天使のメッセージを表している。ダニエル書第1章ではキュロスの第一年が言及され、ダニエルの最後の幻である第10章ではキュロスが第三年として示されているが、ダニエルはキュロスの第一年までしか仕えなかったのだから、その第三年は彼の第一年であることが分かる。

したがって、キュロスは三年を包含する第一年の象徴である。彼は第一の天使のメッセージの象徴である。キュロスの第一年は、ダニエルの最初の幻の最後の節に言及され、さらにダニエルの最後の幻の最初の節でもう一度言及されている。キュロスの預言的象徴性を認識することは重要であり、まず彼が第一の天使のメッセージを表していることを特定している。これは、ダニエルが彼の第三年を第一年として位置づけている事実によって預言的に確証されるが、さらに重要なのは、彼が公布した最初の勅令によってそれが示されているという点である。

第十章においてガブリエルがペルシアの王たちと格闘していたのは、キュロスが三つの勅令のうち最初のを遂行して公布する段階にまで至らせることに関してであった。それらの勅令によって、ユダヤ人は帰還し、エルサレムと神殿を再建することが可能となるのであった。第三の勅令は二千三百年の預言の開始を画するものであり、その預言は1844年10月22日に第三天使が到来したときに終結した。第三の勅令は第三天使を表しており、したがって、キュロスによる第一の勅令は1798年における第一天使の到来を表していた。キュロスは第一天使を表しており、この理由により、ダニエル書において彼の第一年は三年を表していた。

したがって、キュロスは「終わりの時」を表している。というのも、1798年に第一の天使（キュロス）が到来したときに、「終わりの時」が到来し、ダニエル書の封印が解かれたからである。キュロスという名は、「太陽」を意味する古代ペルシア語の“Kuruš”と、「王座」を意味するエラム語の“kursh”が組み合わさったものに由来すると考えられており、王権または王位との結びつきを示している。イザヤ書もまた、キュロスのこれらの特質に言及している。

キュロスについて、「彼はわたしの牧者であり、わたしの望むことをすべて成し遂げる。エルサレムには『建て直されよ』、宮には『その基が据えられよ』と言う」と主は言われる。主はその油そそがれた者、キュロスにこう仰せられる。「わたしは彼の右手を取り、彼の前に国々を征服させ、王たちの腰の帯を解き、彼の前に両開きの門を開いて、門が閉じられないようにする。わたしはあなたの前を行き、曲がった所をまっすぐにし、青銅の門を打ち砕き、鉄のかんぬきを断ち切る。わたしは暗闇の室、密かな所に隠された富をあなたに与える。それは、あなたの名であなたを呼ぶわたし、主、イスラエルの神であることを、あなたが知るためである。わたしのしもべヤコブのため、わたしの選びのイスラエルのために、わたしはあなたの名を呼び、あなたに称号を与えた。あなたはわたしを知らなかったのに、わたしは主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はない。あなたはわたしを知らなかったが、わたしはあなたに腰の帯を締めさせた。日の出る方から西の方まで、人々が、わたしのほかにいないことを知るためである。わたしは主である。ほかにはいない。」イザヤ書 44:28-45:6。

キュロスはキリストの型であった。というのも、彼は主の「油注がれた者」であり、神の「牧者」と呼ばれ、エルサレムを建て、神殿の基を据える者だからである。彼は閉ざされた門を開く者であり、キリストが開けば誰も閉じることができず、閉じれば誰も開くことができない方であると同様である。さらに、「暗やみの財宝、ひそかな所の隠された富」がキュロスに与えられる。キュロスは改革運動の流れの中で、いくつかの道標を成就している。

彼は、第一の天使が到来し、ダニエル書の封印が解かれ、そして「暗やみの宝、ひそかな所の隠れた富」から来る知識の増加が起こる、その終わりの時を示す。それらの「暗やみの宝、ひそかな所の隠れた富」が、「築かれる」べき「基礎」と、「据えられる」ことになる「神殿」を形づくっている。キリストはキュロスによって予表されており、主の「油注がれた者」であるが、それはキリストがその洗礼において油注がれたのと同様である。したがって、キュロスは第一の天使の到来であるだけでなく、キリストが油注がれたときに聖霊が下ったように、第一の天使が下って来るときそれに力を与える第二の天使でもある。

1844年10月22日、キリストは閉じられていた至聖所への戸、すなわち「門」を開かれた。キュロスはまた、第三の天使の到来も示す。

キュロスは第一の天使であり、第一の天使は三人の天使のすべての要素を備えている。キュロスは、第一の天使が到来した1798年の終わりの時である。キュロスは、第一の天使のメッセージが力づけられ（油注がれ）た1840年8月11日を表している。彼は、1842年5月に1843年図表が作成されたことによって示される土台を据える働きを表している。彼はまた、1844年4月19日の最初の失望において二つのグループが分離されたように神殿の建設を表し、さらに1844年10月22日の大失望における第二の分離をも表している。

ミラー派の改革運動のあらゆる道標はキュロスによって象徴されていた。したがって、それらの道標はまた、十四万四千人の運動の道標も象徴している。ミラー派の運動に先立って、キリストがミラー派の歴史に先行すると示したしるしが現れた。

預言は、キリストの来臨のあり方とその目的を予告するだけでなく、それが近いことを人々が知るためのしるしも示している。イエスは言われた、「太陽と月と星にしるしが現れる。」（ルカ21:25）「太陽は暗くなり、月はその光を放たず、天の星は落ち、天にある諸々の力は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。」（マルコ13:24-26）黙示録の記者は、再臨に先立つ最初のしるしをこのように述べている。「大地震が起こり、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月は血のようになった。」（黙示録6:12）

「これらのしるしは十九世紀の始まり以前に目撃された。この預言の成就として、1755年にこれまでに記録された中で最も恐ろしい地震が起こった。」『大いなる論争』304ページ。

再臨を告げるしるしは、1798年の少し前、1755年に始まった。1798年は、霊的バビロンにおける霊的イスラエルの捕囚の終結であり、ホワイト姉妹の教えるところでは、それは、七十年の捕囚の終わりに、キュロスが開かれた城門から入りバビロンを占領し、ベルシャザルを殺したときに終結した、文字通りのバビロンにおける文字通りのイスラエルの捕囚によって予表されていた。

「今日、神の教会は、失われた人類の救いのための神の御計画を、成就に至るまで推し進める自由を与えられている。幾世紀にもわたり、神の民は自由の制限に苦しんだ。純粋な福音の宣教は禁じられ、人間の命令に敢えて背く者には最も厳しい刑罰が科せられた。その結果、主の偉大な道徳的ぶどう園は、ほとんど人の手の入らない状態であった。人々は神の御言葉の光を奪われていた。誤謬と迷信の間が、真の宗教の知識を

消し去ろうとしていた。地上にある神の教会は、この容赦のない迫害の長い期間、捕囚の時代にバビロンで囚われの身となったイスラエルの子らと同様に、まさしく捕らわれの状態にあった。」『預言者と王』714ページ。

バビロンにおける七十年の終わりは1798年を予表しており、1798年に先立って、キリストの再臨が差し迫っていることを告げるしるしがあった。

「バビロンの城壁の前にキュロスの軍隊が現れたことは、ユダヤ人にとって、捕囚からの解放が間近に迫っているしるしであった。キュロスの誕生よりも一世紀以上も前に、神の靈感は彼を名指しで言及し、彼が不意を突いてバビロンの都を陥落させ、捕囚の子らの解放のための道を備えるという、彼が実際に行う働きについて記録を残させていた。」『預言者と王たち』551ページ。

キュロスもまた、1798年に先立つしるしを予表していた。ダリヨスとキュロスの統治について歴史家たちはかなり曖昧であるが、神の御言葉は明確である。メディア・ペルシア帝国はバビロン帝国に続き、メディア・ペルシアの最初の王はダリヨスであったが、ベルシャザルの最後の饗宴の夜にバビロンを攻略した將軍は、その甥キュロスであった。キュロスとダリヨスはともに、七十年の捕囚の終わりの時を予表しているが、それは1798年における終わりの時を表しており、また1989年における終わりの時をも予表している。

モーセの時代における終わりの時は、三年を隔てて生まれたアロンとモーセの誕生によって特徴づけられた。その歴史はキリストの歴史を最も完全に型どっており、その歴史における終わりの時は、ヨハネの誕生と、その六か月後の彼のいとこイエスの誕生によって示された。終わりの時には二つの道標があり、ダレイオスとキュロスは共に七十年の捕囚の終わりを示しており、それは千二百六十年の捕囚の終わりを型どっていた。1798年の教皇権の獣の致命的な傷の後には、翌年、その獣にまたがりそれを支配していた者の死が続いた。1989年にはレーガンとブッシュ（父）の両者が大統領であった。

キュロスは、終わりの時の到来を告げるしるしを示し、また終わりの時そのものをも示す。彼は、知識が増し加わること、天使が降りるときに第一のメッセージが力を帯びることを示し、さらに、その後に着手される土台を据える働き、神殿を建てる働き、そして契約の使者が突然ご自分の神殿に来られるときの第三の天使の到来をも示す。

ペルシアの王キュロスの第三年に、その名をベルテシャザルと呼ばれていたダニエルに、一つの事が示された。その事は真実であったが、定められた時は長かった。彼はその事を悟り、幻を理解した。そのころ、私ダニエルは三週間のあいだ喪に服していた。私はうまいパンを食べず、肉もぶどう酒も口にせず、また身に油を塗ることもしなかった。三週間が満ちるまで。

第一の月の二十四日、私は大河ヒデケルのほとりにいた。ダニエル書 10:1-4。

キュロスとベルテシャツアルの象徴は、終わりの時における特定の預言的歴史を表している。ベルテシャツアルの象徴は、そこで表されている民が契約の民の最後の世代である十四万四千人であることを私たちに教えている。彼らはキュロスによって表される預言的歴史の中に置かれている。キュロスは1798年、1989年、そして2001年9月11日に先立つ歴史を表すとともに、これらすべての道標そのものを表しているからである。彼はまた、2020年7月18日の失望、さらには間もなく米国に到来する日曜法さえも表している。ダニエ

ルの最後の幻が預言上どこに位置づけられるかを見分ける鍵は、ダニエルが何を知っているかにある。

第1節で、ダニエル（ベルテシャツアル）は「事」と「幻」の双方を理解している。「事」とは、ヘブライ語の『dabar』で『言葉』を意味し、それはガブリエルによって、二千五百二十年（「七つの時」）の『chazon』の幻を表すために用いられている。ダニエルが理解している第1節の「幻」は、二千三百年の『mareh』の幻である。終わりの時代の神の契約の民は、1989年の「終わりの時」に「七つの時」を理解していなかった。彼らが「七つの時」を理解したのは2001年9月11日以後であり、それゆえ、ダニエルは、2001年9月11日以後の、キュロスによって表される預言的改革運動の時代にいるに違いない。というのも、最終的な預言運動を表すダニエルは、「事」と「幻」の双方を理解しているからである。

ダニエルは二十一日間の嘆きの期間の中にある者として示されている。嘆きの「その日々」において、ダニエルはその「こと」を理解し、またその「幻」についての悟りを得た。「こと」によって表される真理は、嘆きの日々の中でダニエルに啓示された。神の民は、改革の線において、真夜中の叫びの直前に「嘆いている」者たちとして表されている。その嘆きは、凱旋入城の直前、ラザロのために嘆くマルタとマリアによって表されている。それはまた、エレミヤによって表明された、ミラー派の歴史における最初の失望の後の落胆によって例示された。

私はあなたの言葉を見だし、それを食べました。あなたの言葉は私にとって、私の心の喜びと楽しみとなりました。万軍の神、主よ、私はあなたの御名によって呼ばれているからです。私は嘲る者たちの集まりに座らず、喜びもしませんでした。私はあなたの御手のゆえにひとり座っていました。あなたが私を憤りで満たされたからです。なぜ私の痛みは絶えず、私の傷は癒されず、癒えることを拒むのでしょうか。あなたはまったく私に対して偽り者のように、また涸れる水のようになられるのでしょうか。
エレミヤ書 15:16-18

エレミヤは、二人の証人の死に際して「喜ばなかった」。それは、黙示録第11章でソドムとエジプトの市民がしたように喜ぶことではない。「喜ばない」とは、嘆くことである。ベルテシャツアルの嘆きは、二人の証人の死に伴う嘆きを明らかにしている。2020年7月18日と2020年11月3日、私たちの主も十字架につけられたその場所、すなわちソドムとエジプトの通りで、地の獣の真のプロテスタントの角と共和党の角々に属する二人の証人が打ち殺された。私たちの主が十字架につけられたとき、弟子たちは嘆き始めた。その二人の証人は、黙示録第11章ではモーセとエリヤとして描かれていた。

聖書には、キリストをミカエルとして言及している箇所が五つある。三つはダニエル書に、ひとつはユダの手紙に、もうひとつはヨハネの黙示録にある。今取り上げている第10章では、13節と21節にミカエルの名が二度言及され、さらに第12章1節にも再び言及がある。彼はヨハネの黙示録12章7節で明確に示されている。ユダの手紙では、ミカエルがモーセを復活させる者として示されており、そのモーセはヨハネの黙示録11章で、路上で死んでいる証人の一人である。

それゆえ、あなたがたに思い起こさせる。あなたがたはかつてこれを知っていたが、主がエジプトの地から民を救い出されたのち、信じなかった者たちを滅ぼされたことを。また、初めの地位を守らず自分の住まいを離れた御使いたちを、彼は大いなる日の裁きのために、暗闇の中に、永遠の鎖でつないで留め置いておられる。ソドムとゴモラ、およびその周囲の町々も同様に、不品行に身を任せ、異なる肉を追い求め、永遠の火の刑罰を受けて、見せしめとされた。同じように、この汚れた夢想家たちも、肉を汚し、主権を侮り、栄光ある者たちをそしる。しかし大天使ミカエルでさえ、悪魔と争ってモーセの体のことで論じ合ったとき、彼に対してののしりの訴えを持ち出すことは敢えてせず、「主があなたを戒められるように」と言った。ユダの手紙 5-9節。

ユダの手紙では、ソドムとエジプトは、黙示録11章でモーセとエリヤが殺される大いなる都を表しており、ミカエルにより象徴されるキリストがモーセの体をよみがえらせる。モーセとエリヤは黙示録11章において象徴的な三日半のあいだ死んでおり、ベルテシャザルの喪の日々は、ミカエルが天から下って来るときに終わる。逐一見れば、ダニエル書10章1~4節は、二人の証人がミカエルによって復活させられるときに終わる嘆きの期間を示している。

この研究は次回の記事で続けます。

父なる神は、モーセとエリヤを、キリストへの使者とし、天の光によって彼を栄光のうちに輝かせ、また、これから受ける苦難について彼と語り合う者としてお選びになった。彼らは人として地上に生き、人間の悲しみと苦しみを経験し、地上の生涯におけるイエスの試練に同情することができたからである。イスラエルへの預言者という立場にあったエリヤはキリストを表し、その働きはある程度、救い主のそれと似ていた。そしてモーセは、イスラエルの指導者としてキリストの代理となり、彼と交わり、その指示に従っていた。ゆえに、神の御座の周りに集う天の軍勢のうち、この二人こそが神の御子に仕えるのに最もふさわしかった。

イスラエルの子らの不信に憤ったモーセが、怒りにまかせて岩を打ち、彼らが求めた水を与えたとき、彼は栄光を自分に帰した。というのも、彼の心はイスラエルの忘恩と強情さにあまりにもとらわれていたため、神が彼に命じたその行為を行うにあたって、神を崇めその御名を高めることを怠ってしまったからである。全能者の御計画は、しばしばイスラエルの子らを窮地に置き、彼らが切なる必要に迫られたときにその御力によって彼らを救い出し、神が彼らに向ける特別な顧みを彼らが認め、その御名をあげめるようにすることにあった。しかしモーセは、心の自然の衝動に身をゆだね、神に帰すべき栄誉を自分に帰し、サタンの力の下に陥り、約束の地に入ることを禁じられた。もしモーセが堅く立っていたなら、主は彼を約束の地へ導き、そののち、死を見ることなく、彼を天に携え上げただろう。

実のところ、モーセは死を経たが、神の子が天から下って、彼の遺体が朽ち果てる前によみがえらせた。サタンはモーセの遺体をめぐってミカエルと争い、それを自分の正当な獲物だと主張したが、神の子には勝てなかった。そして、よみがえらされ栄光のからだを与えられたモーセは、天の宮廷へと運ばれ、今や、父なる神によって御子に仕えるよう任命された、栄誉ある二人のうちの一人名となった。

彼らがこれほどまでに眠気に身を任せることを自ら許してしまったために、弟子たちは、天の使者たちと栄光を帯びた贖い主との語らいを聞き逃してしまっていた。しかし、深い眠りから突如として目覚め、目の前に展開する崇高な幻を見たとき、彼らは歓喜と畏怖に満たされた。愛する師の輝かしい御姿を仰ぎ見るうちに、彼らは手で目を覆わざるを得なかった。主の御身を包み、太陽のような光の光線を放つ、言い尽くせない栄光に、そのままでは耐えられなかったからである。わずかな間、弟子たちは、目の前で栄光に輝き高められている彼らの主を仰ぎ見、また、彼らが神に選ばれた者と認める光り輝く存在から尊ばれているのを見た。

『預言の霊』第2巻、329、330頁。